

氏名	窪 田 政 寛		
学 位 の 種 類	医 学 博 士		
学 位 授 与 番 号	乙 第 1420 号		
学 位 授 与 の 日 付	昭和58年12月31日		
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）		
学 位 論 文 題 目	ウイルス肝炎より肝硬変への移行 一腹腔鏡と臨床観察による進展要因一		
論 文 審 査 委 員	教授 木村郁郎	教授 太田善介	教授 小川勝士

学位論文内容の要旨

ウイルス肝炎から肝硬変への移行の状態、特に肝炎の進展要因を知る目的で、正確な診断が可能な腹腔鏡検査を2回以上実施した症例を対象として、その腹腔鏡所見と臨床的所見の観察から、以下の結論を得た。1959年より1976年までに岡山大学医学部第一内科で、2回以上腹腔鏡検査が行なわれた肝炎例のうち、肝表面が平滑であった102例中15例が肝硬変へ移行した。その内訳は HBsAg 陽性群が29例中11例（37.9%）と多く、HBsAg 陽性群35例では0例、HBsAg 陰性・Ab 陰性群38例では4例（10.5%）であった。また肝硬変への移行例は HBsAg 陽性群が若年層に多いのに対し、HBsAg 陰性・Ab 陰性群では加齢とともに増加した。その移行に要した期間は HBsAg 陽性群で短かった。発病当初の肝腫大はこれを認めなかった症例が、TTT 値 KicG 値は異常が強い症例が、それぞれ病変の進展率は高かったが、黄疸・脾腫の有無、血清ビリルビン値、S-GPT 値、ZTT 値および γ -グロブリン値との関係は認められなかった。

論文審査の結果の要旨

本研究はウイルス肝炎より肝硬変への移行について腹腔鏡と臨床観察の面からその進展要因を追及したものであるが、従来十分観察されていなかったこととして HBsAg 陽性群に肝硬変への移行が多いのに対して HBsAg 陽性群では認められず、その要因に肝腫大のないもの或は TTT 値とか KicG 値の異常の強い症例に進展率の高いことを認めており、重要な知見をえたものとして価値ある業績であると認める。

よって本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。